

化学教育 徒然草



「化学と教育」の役割

WATANABE Tomohiro

渡部 智博

立教新座中学校・高等学校 教諭
教育・普及部門 副部門長
普及交流委員会 委員長



巻頭言

「化学と工業」で年1回化学教育の問題を特集するだけでは不十分で“化学と教育”に関わる機関誌が必要¹⁾として、1953（昭和28）年3月、「化学と教育」のルーツとなる「化学教育シンポジウム」の第1集が創刊された。当時の雑誌を見ると、大学や高校の教師だけでなく、博物館、企業、文部省関係者など化学に関係する方々が執筆されている。一方、アメリカ化学会の Journal of Chemical Education は1924年に創刊されており、本学会は30年遅れていた。30年遅れた「化学と教育」誌も、今では70年もの歴史があり、本誌はもちろんのこと、ホームページなどにも素晴らしい記事が掲載されている。

“科学（化学）的に正しい「炭素循環」を我が国が目指す社会の用語として使おう！”という記事²⁾が、菅裕明会長と塩野毅教育・普及部門長の連名で「化学と工業」やホームページで発表された。普段から“脱炭素”という言葉を目にし、腑に落ちないでいたが、この記事を見て、あらためて本学会の意義や私自身の教師としての役割を実感した。

70年前から現在まで、化学教育は中学・高校の教育現場に立つ教師だけではなく、大学や企業の研究者や技術者、博物館などで普及啓蒙活動する方など、幅広い立場の方々に支えられてきている。

本学会から発信された記事は、最も信頼できる内容が含まれている。学校教育として化学を学ぶ多くの生徒と直接対面する機会が与えられている教師には、“炭素循環”など適切な用語だけでなく、正確な化学を、生徒に伝える役割がある。本学会には多くの教師が名を連ねる。必ずしもすぐに効果が現れるわけではないかもしれないが、皆で協力して本学会から発信された情報を、しっかり伝えていきたいものである。

1) 玉虫文一, 化学教育シンポジウム 1953, 1, 1.

2) 菅 裕明, 塩野 毅, 化学と工業 2022, 75, 667.

[連絡先]

352-8523 埼玉県新座市北野1丁目2-25 (勤務先)